

Chinese Geolinguistics: History, Current Trends, and Theoretical Issues

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/12333

中国語の言語地理学*

-歴史、現状及び理論的課題-

岩田 礼

[キーワード] 言語地理学、W.グロータース、B.カールグレン、『中国語言地図集』、PHD プロジェクト、淮河線、長江線、牽引、同義衝突、同音衝突

第一部 歴史と現状

1. はじめに

中国における言語地理学は、W.グロータース神父が山西省大同市の教会に赴任した1941年7月に始まり、神父が中国を離れた1948年8月にひとたびの終焉を迎えた。この8年間の経緯と主な研究成果についてはGrootaers(1994, 2003)に詳しく、また岩田(2002)でもその歴史的意義を述べたので、繰り返さない。本稿第一部の目的は、20世紀の中国で―傍流の言語地理学に対して―主流を形成した方言研究の概要と近年の研究動向を紹介することである。

* 本稿は、2007年8月22日、23日に開催された第14回国立国語研究所国際シンポジウム「世界の言語地理学」(Geolinguistics around the World)の予稿集掲載原稿に加筆、修正を加えたものである。このシンポジウムでは、1日目「各地の言語地図作成状況」、2日目「言語地図の活用方法」というテーマが設定され、私は両日とも発表を行なった。本稿の第一部、第二部は、それぞれ1日目、2日目の発表に対応している。このシンポジウムのコーディネータを務められた国立国語研究所の大西拓一郎氏には様々お世話になった。

2. 古音の再構と方言区画

中国の文献言語学が清朝の時代に輝かしい成果を収めたことはよく知られている。中国を代表する頭脳集団であった清朝考証学者が“古音”と呼んだのは、『詩経』の時代の中国語の音韻体系であった。この研究はちょうど時を同じくしてヨーロッパ人が進めた印欧祖語の再建に匹敵するが、異なるのは清朝考証学者の関心が現存する言語の比較には向かわなかったことである。その一つの理由は、彼らの手元に 1,000 年以上も前のレディメードの音韻的枠組み—『切韻』(601 年、陸法言撰)—があり、現代中国語を参照する必要性が認識されなかったことである。彼らはこれを“今音”と呼んだ。

B.Karlgren『中国音韻学研究』(1915-1926)の意義は、『切韻』を中国語の歴史を研究するための一つの参照点(reference point)と位置付けたことにある。その枠組みに音価を当てはめるために、彼は自ら 24 の方言を調査した。しかし対象は口語語彙ではなく、字音、つまり漢字の発音であった。つまり民衆の話言葉にはなお市民権が与えられなかった。

中央研究院歴史語言研究所(1928 年設立)に集まった趙元任ら中国の若きリーダー達にとって、Karlgren がもたらした方法は前代を乗り越えるために必要な工具であった。彼らの調査票はいくつかの口語語彙を含むが、主体はやはり漢字のリストである。これにはつとにグロータース神父の厳しい批判があった(Grootaers 1994, 2003)。しかしどの国、どの地域であっても、研究の初期段階における人々の関心はまず全国的な方言分布の把握に向かうものである。字音調査は、それで切り捨てられる部分が多いことは事実だが、簡便に各地の方言の音声的特徴を把握できるメリットがある。広大な国土を有するこの国でこのような方法による全域調査が優先されたのも無理からぬことであった。G.Wenker や柳田國男の発見も調査通信の産物ではなかったか。

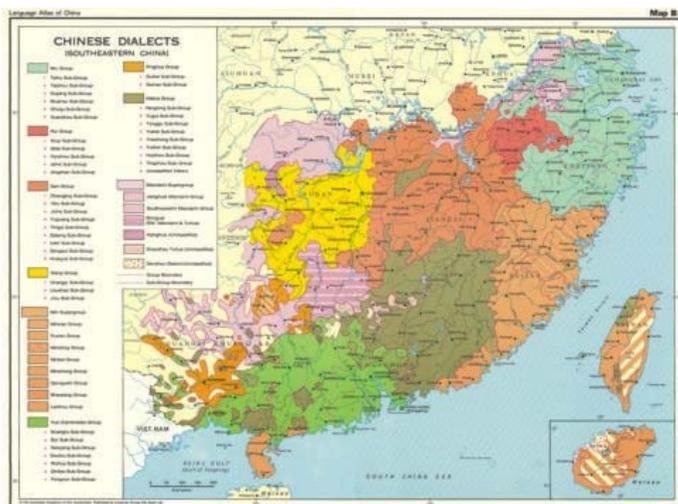
日中戦争の影響によって、調査が実施されたのは長江流域のいくつかの省(湖北、湖南、雲南、四川など)にとどまったが、各調査報告にはそれぞれ多くの地図が掲載されている。地図 1 は、『湖北方言調査報告』(1948)からの一例。「家」「間」「学」など 26 字について、“口蓋化”(例えば「家」ka>tcia)を起こしていない字の割合を示している。



地図 1
『湖北方言調査報告』
第五図
口蓋化不生起の比率

語彙項目も含む多くの地図を総合して“方言区画”の結果が示されており、区画論としては常道である。このような省ごとの方言区画の延長上には当然、全国規模の方言区画がある。例えば、ここに挙げた口蓋化は、中国語方言を南北に分かつ特徴の一つである(Norman1988)。

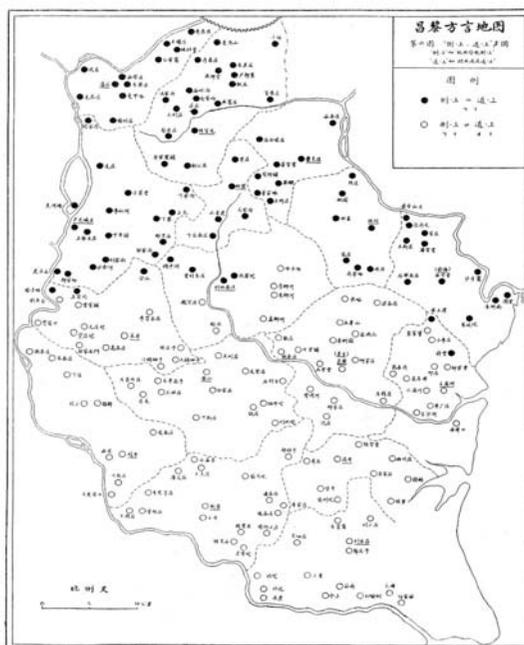
全国方言の区画が一応の完結をみるまでには、中央研究院歴史語言研究所設立から数えて 60 年の歳月を必要とした。1987 年に出版された『中国語言地図集』(Language Atlas of China: LAC)である。36 葉の地図のうち、ちょうど半数の 18 葉が漢語方言に関するもの。地図 2 はそのうちの 1 枚で、東南地域の分布を示す。



地図 2
中国語言地図集
B8 東南方言
(<http://www.rcl.cityu.edu.hk/atlas/B8.html> による)

この地図で、右上角の薄青色の地域は、“呉語”と呼ばれる方言の分布地域である。この方言群については、つとに趙元任(1928)の調査、研究があり、彼は“呉語”を“頭子音の三項対立(e.g., p, p^h, b)を有する方言”と定義した。但しこれは「暫定的な“作業仮説”」であり、この定義或いは“呉語”なる概念が成立するか否かは今後の詳細な研究を俟たねばならない、としている。LAC における“呉語”は趙元任の定義に従っているが、それがいかなる検証を経て 60 年後の LAC で定説に至ったのかは明示されていない。

1949 年以降の中国では、“標準語の普及”という政治的、社会的要請が優先され、標準語学習運動が展開される中で、方言調査はその目的のために実施された。その中で特筆すべきは、1959 年に社会科学院語言研究所によって実施された河北省昌黎県での方言調査である。翌年には早くも成果が刊行された(『昌黎方言志』)。そこには多くの口語語彙が収録されており、また地図 11 葉を収める。地図 3 はそのうちの 1 枚である。

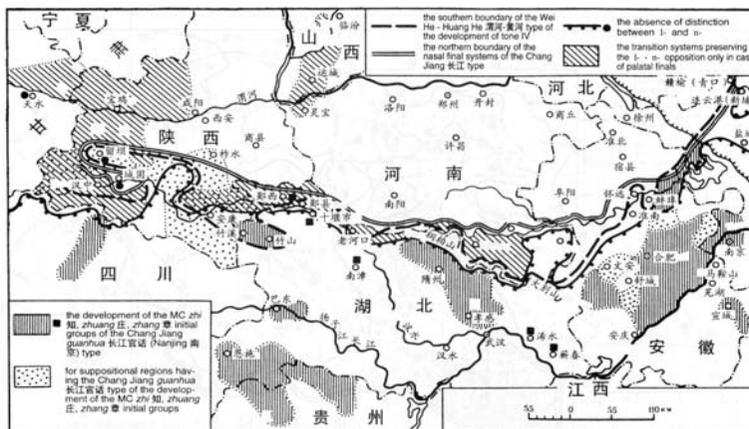


地図 3
『昌黎方言志』第六図
「倒上」と「道上」の声調

この地図では「水を彼にかける」、「水を道にまく」という例文の下線部の声調が比較されている。これは音韻法則的特徴を確認するための調査項目な

のだが、漢字ではなく、例文によって調査された点が画期的である。しかし『昌黎方言志』の地図 11 葉はほとんどが南北差を表現したものであり、目的は方言区画にあった(李栄 1985)。

1980年代の研究としては、Zavjalova(1983)による等語線の発見が特筆される。いくつかの重要な音韻的特徴に関する等語線が東は山東半島の付け根から西は秦嶺山脈まで伸びていることが明らかとなった。地図 4 はその改訂版。これは官話方言を南北に分断する方言境界線であり、私は“淮河線”と呼んでいる。



Map 7. The boundary between the Northern and the Southern (the Chang Jiang 长江) guanhua 官话 areas

地図 4 官話地域を南北に分断する等語線の東 (Zavjalova and Astrakhan.1998)

3. 最近の動向と PHD (Project on Han Dialects)

『中国語言地図集』以降の研究動向は、海外からの理論言語学の流入も手伝って多様化している。例えば、J.Norman 氏、秋谷裕幸氏らは、『切韻』を参照点(reference point)とした Karlgren 以来の発想を捨て、口語語彙に基づく純粋な方言比較によって、各地域の祖語を下から再構しようと試みている(Norman1988: 228-241, 秋谷 2003)。また「中国語方言は、音声的差異は大きい、文法的な差異は少ない」という一種の偏見は、方言文法の記述研究の進展によってすでに打破されている。

過去二年間に、「言語地理学」と題した専門書が二冊刊行された。一つは項夢冰・曹暉(2005)である。これは“等語線”の概念を詳細に検討するなど教わる所も多いが、方言分類の観点がなお濃厚で、語の伝播と変容といったダイナミックな観点は乏しい。もう一つは、R. Simmons(史皓元)、石汝傑、顧黔の三人による米中共同調査の報告書である(史皓元ほか 2006)。対象地域は、上記“淮河線”と並ぶ重要な方言境界線“長江線”付近であり(方言分類上は呉語と官話を分かつ方言境界線)、等語線が密集する箇所ではほとんどシラミツブシ調査に近い。調査項目は口語語彙を主とする。地図 5 はその一例(作図は福嶋秩子氏の SEAL による)。音声の地理的推移の実態を詳細に記録・表現している。ただここでも方言区画の発想は根強い。

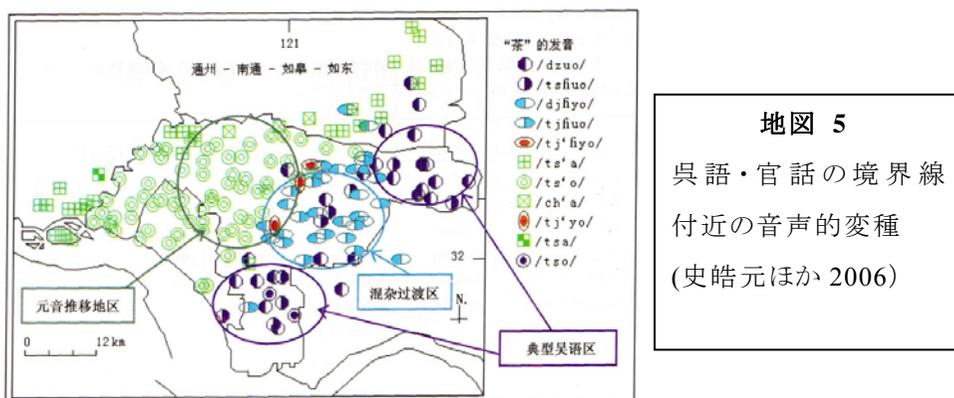


图 75 通州“茶”的“a > [o]”推移与方言分区

地図 5

呉語・官話の境界線
付近の音声的変種
(史皓元ほか 2006)

最後に現在進行中の二つの方言地図作成プロジェクトについて言及する。

1) 日本：PHD(Project on Han Dialects)

このプロジェクトは1989年以来の歴史を有するが(岩田 1992, Iwata1995)、未だに地図集公刊に至っていないのは遺憾である。2004年からXMLベースのデータベース構築に着手し、言語データ入力と地図作成はネット上で行なっている(Iwata2005, Hayashi2005, 岩田・太田 2007)。この研究の成果については、本稿第二部で紹介する。

2) 中国：『漢語方言地図集』

曹志耘教授をリーダーとする北京語言大学語言研究所の研究グループは、多くの研究者(上記 Simmons 氏や日本の秋谷裕幸氏を含む)の協力を得て、2002 年から 2006 年にかけての 4 年間に約 930 地点を対象とした農村方言調査を実施した。Grootaers(1994, 2003)の提言に沿って、調査地点は県城(県庁所在地)が避けられている。地図編纂作業は急ピッチで進んでおり、2008 年 3 月には、音韻 2 冊、語彙 2 冊、文法 1 冊からなる「漢語方言地図集」が刊行される予定である。なおこの大規模プロジェクトについては、2007 年度に金沢大学連携融合事業「日中両国における無形文化遺産保護と新文化伝統創出に関する共同事業」との提携が実現し、シンポジウム開催等の共同事業に取り組んでいる(岩田編 2008 参照)。

第二部 理論的課題

1. はじめに

本稿第一部で述べた状況に鑑みれば、我々が果たすべき役割は一つしかない。それは「言語地理学の目的は言語の歴史を明らかにすることにある」(柴田武 1969)との認識のもと、一枚一枚の地図から言語変化の様相とその要因を考察すること、これによってヨーロッパと日本の言語地理学が蓄積してきた数々の発見を中国語方言について確認することである。

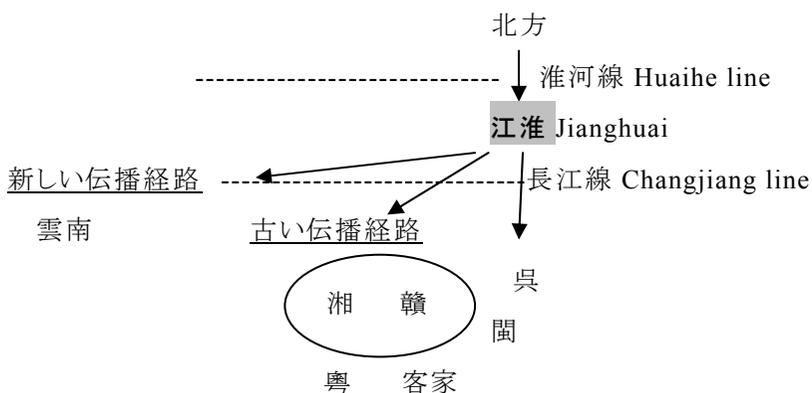
このような認識に基づいて作成された地図は、製作者の“解釈”を示すものである。製作者は予め語形と意味を分析し、分類作業を行なう。中国語で有効なのは“形態素単位の分析”(morpheme based analysis)である。分類結果に基づいて地図を作成し、“有意義な分布”が得られるまで分類を続ける。複数の分類方法のいずれも“有意義”と判断されれば、同一項目について何枚もの地図を作成する。以下、私自身が作成した地図を例に、これまで得られたいくつかの“発見”を紹介する。

2. 言語伝播の方向

中国語の方言分布の歴史的形成を解くキーワードが二つある:①北方化、②南の中核地域(kernlandschaft)。

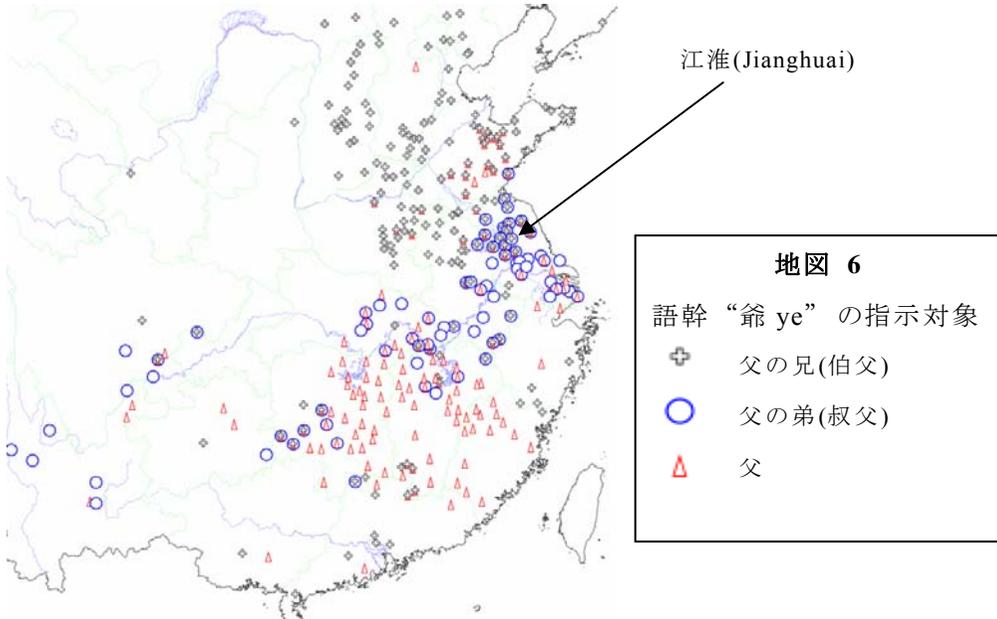
“北方化”とは、ここでは「語が北から南に伝播すること」と定義する。語の伝播には、大きく言って二種類の形態がある。一つは、移民、人口移動による“飛び火伝播”。もう一つは、村から村へ言葉が地を這うように進んでいく“地伝い伝播”である。日本の方言学では、通常後者が想起されるが、中国の場合は、一にも二にも“飛び火伝播”、即ち移民による方言の移動である。ほとんど議論がないままそう信じられているかのようで、「言葉は旅をする」という言語地理学の常識が常識になっていない。これまでも再三触れているのでこれ以上繰り返さないが、移民説一辺倒の現状は是正されねばならない(Iwata 1995: 222-223, 岩田 2007a:125)。少なく見積もっても、“北方化”をもたらした要因は、“地伝い伝播”と“飛び火伝播”の双方である。

“南の中核地域”とは、南京(六朝時代に首都が置かれた)、揚州(古い商業都市)を中心とする江淮地域を指し、この地域が北方からの言語伝播の中継点として、また新たな変化の発信地として、周辺地域に強い影響を及ぼしていたことを含蓄している。下図はこの仮説の骨子(岩田 2000:19)。東西方向に走る方言境界線(等語線の束)として“淮河線”と“長江線”がある(本稿第一部参照)。



この仮説を立証する例として、地図 6 を挙げる。これは父系親族を表す語幹“爺 ye”に着目し、それが〈父〉、〈父の兄〉、〈父の弟〉のいずれを指すかを

示したものである(Iwata2000)。以下、語形は“ ”、語義は〈 〉で表示し、語形の音声表記は標準語形の Pinyin ローマ字で代用する。



次の分布傾向を認めることができる。

- (1) 北方(東部):〈父の兄〉
- (2) 長江流域:〈父の弟〉
- (3) 南方(主に内陸部):〈父〉

このうち最も古い用法は(3)である。“爺 ye”は“淮河線”を越えてまず江淮地域に到達。次に長江線を越えて南下したが、多くは真南に進むのではなく、上記の“古い伝播経路”を通して南西方に伝播した。“爺 ye”が〈父〉のみを指すという本来の用法はそこで保存された。これに対して、北方と江淮では次のような“指示対象の転移”(semantic shift)が起きた。

- (1) 北方(東部):〈父〉→〈父の兄〉
- (2) 江淮:〈父〉→〈父の弟〉

この二つの変化にはいずれも言語外的要因が関与している。(1)の変化が生起した北方地域は、“爺 ye”が〈父の父〉(祖父)を呼ぶのにも

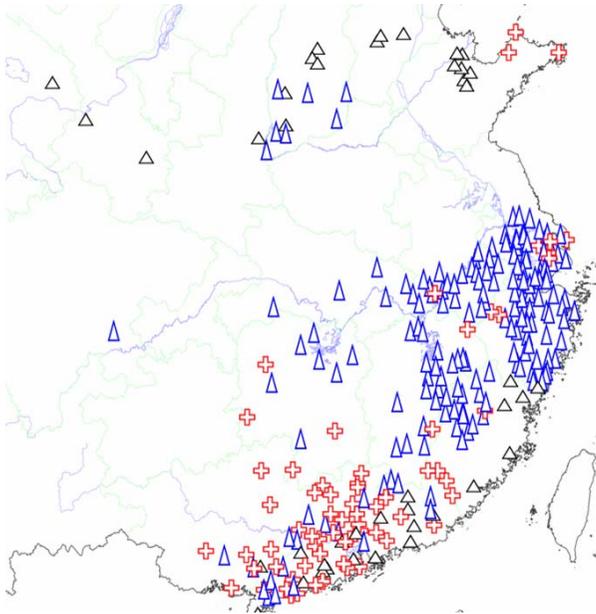
使われる地域で(岩田 1995b)、おそらく中国の家族制(“宗族制”)における長兄、祖父重視を反映している。(2)の変化は星命思想に基づく“改称現象”の産物であり、長江流域では現在でも〈父の最年少の弟〉を〈父〉を表す語幹で呼ぶ風習が残存している(岩田 1988:232-241)。(1)と(2)の違いは、淮河以北の北方地域と江淮地域との間で文化的基盤の相違が存在したことを窺わせる。

地図 6 では、青の円記号〈父の弟〉に十字記号〈父の兄〉が重なる地点が少なくない。これは外的要因と内的要因が重なった結果である。まず江淮地域全体に(2)の変化が起きた。その後 (1)の変化を起した北方方言の影響(外的要因)と父の兄弟を同一語幹で呼ぼうとする一種の簡略化(内的要因)によって、〈父の弟〉〈父の兄〉の双方を“爺 ye”と呼ぶに至ったものである(岩田 1995a:70)。加えて〈父〉も“爺 ye”と呼ぶ方言もあるが、いわゆる同音衝突の問題は生じない(下文第 4 章参照)。中国語の親族呼称は、“大爺、二爺、三爺…小爺”のように、排行数とセットだからである。

江淮で生まれた(2)の用法は、上図の“新しい伝播経路”を通して雲南まで伝播した。このような分布を“長江型分布”と呼ぶ。この新しい伝播経路の形成には、明代に始まる雲南殖民とそれに伴う長江沿い交易ルートの確立が貢献したであろう(岩田 2000:18)。“地伝い伝播”の一種であるが、語は港から港へと船によって運ばれるので、伝播速度はかなり速い。

3. 語史の再構

“ABA 分布”、“周圏分布”には例外も多いことが知られているが、状況証拠が揃えば「A は B より古い」、「周辺に分布する語形が古い」と判断できる。例えば、地図 7 において、〈tomorrow〉や〈morning〉を表す語幹“朝 zhao”は長江以南に広く分布するが、そこから遠く離れて北方にも見られる。この場合、“朝 zhao”はすでに単用されず、また北方では造語能力も乏しい形態素であるから、古形の残存と見なす以外に選択肢はない。



地図 7

形態素“朝 zhao”、“早 zao”

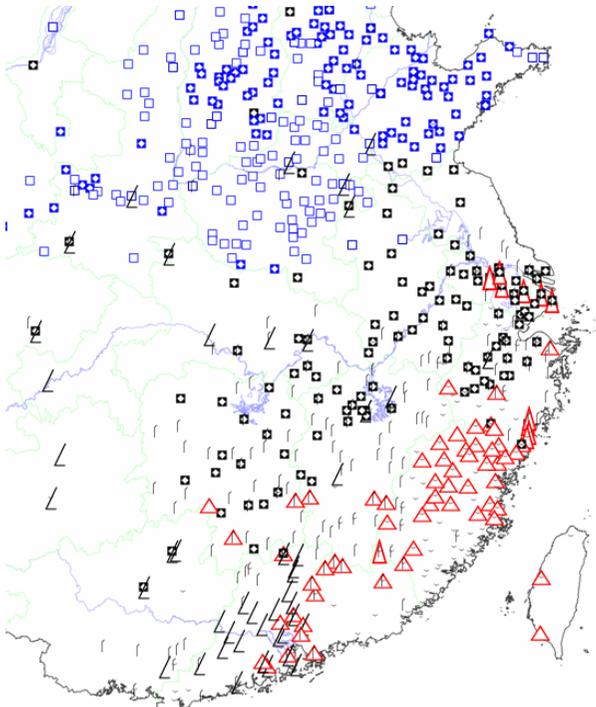
の指示対象

<tomorrow>

-  明朝 mingzhao
-  清朝 qingzhao
- 明早 mingzao
- 早起 zaoqi etc.
- etc

<morning>

-  早朝 zaozhao
- 朝早 zhaozao
- 朝晨 zhaochen etc.



地図 8

形態素“夜 ye”の指示対象

<yesterday>

-  夜来 yelai, 夜里 yeli
-  夜兒 yer, 夜個 yege
-  昨夜 zuoye
-  昨冥 zuoming etc.

<evening, night>

-  夜来 yelai, 夜里 yeli
-  夜晚 yewan
-  夜晡 yebu, 夜頭 yetou
- etc.

〈tomorrow〉と〈morning〉で同じ語幹が共有されるのは印欧語や日本語と平行的である。これに対して〈yesterday〉と〈evening, night〉を表す語形は、語幹“夜 ye”(又はその類義語)を共有していたと推定される。地図 8 において、赤の三角記号で示した語形(“昨夜”、“昨冥”など)は〈yesterday〉を表わす古形の残存である。青の四角記号(“夜来”、“夜里”、“夜兒”)も〈yesterday〉を表わすが、こちらは比較的新しい時代に、その指示対象が〈evening, night〉からシフトしたものである(次章参照)。

一方、〈tomorrow〉と〈yesterday〉を表す古語には“明日 mingri”、“昨日 zuori”もあった。かくして古代中国語の日にちを表す語の体系は二重構造であったことになる。

I 昨日 今日 明日

II 昨夜 今日 明朝

平行例として上記〈父〉を表す語幹がある。

I “父”*bia > “爸”*pa

II “爹”*tia > “爺”*jia

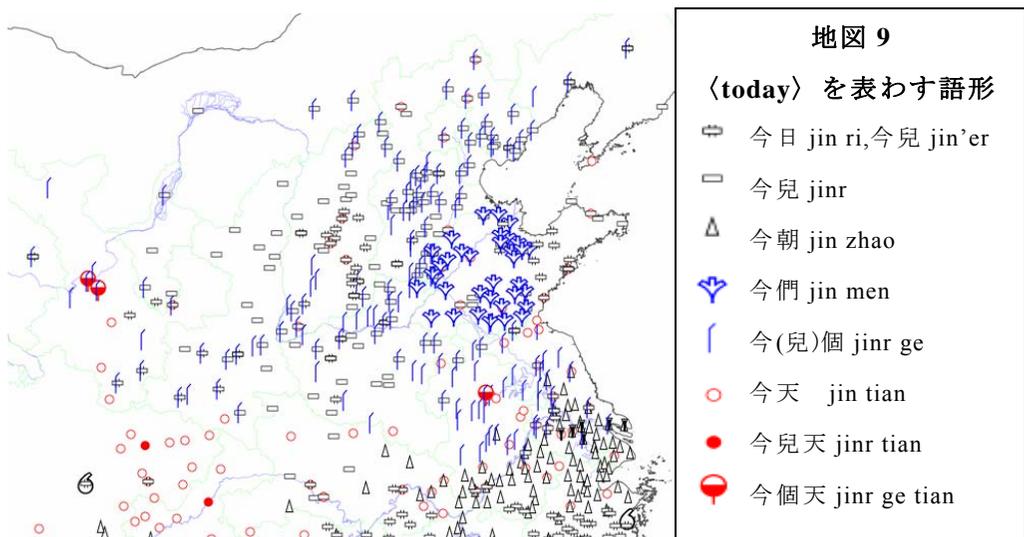
言語地理学はまた従来の文献語源学の誤りを正すことができる。例えば、清朝を代表するすぐれた考証学者であった程瑤田は、文献言語と口語語彙の中に、音節頭子音(initial)が k-l の順に現れる大量の複音節語を見出し、これらがすべて古代の同源語グループに遡るものと主張した。私は俗語に価値を見出した程瑤田を尊敬しているが、これと全く同じ発想と手法によって語源研究がなされている現状は、学問の退化である。方言地図の観察に基づく見通しによれば、現代方言の k-l 語群は比較的新しい時代の産物であり、k-接頭辞が増殖したこと及びストレスアクセントの発達(二音節語の“強-弱”型、三音節語の“中-弱-強”型)によって弱音節が l-音節に変化したことに因る(Iwata2006、岩田 2007b)。

4. 牽引と衝突

[語の衰弱と牽引]

言語内部の要因と外部的圧力によって衰弱していく語がある。それに対して言語は様々な治療を施して語の活力を取り戻す—これはジリエロンやドーザの作品を貫く一つのモチーフである(松原・横山 1958、大川・グロータース・佐々木 1991-1997)。これまで得た印象では、中国とフランスの方言は、いずれも南北対立を機軸としつつ、北部で激しい変化が起きているという点で平行的である。

語の衰弱をもたらす要因の一つは音韻変化である。中国語でストレスアクセントが発達したのは、音韻構造の簡略化に伴い、同音衝突を回避すべく複音節語が増殖したことに起因するが、その結果、“強-弱”型(trochaics)の二音節語が他の語によって牽引される現象を生んだ(岩田 2007b: 12-18)。



日にちを表す時間詞は、北方方言において“個 ge”(量詞)、“們 men”(人称代名詞複数語尾)のような付属語を取ることが多い。地図 9 の〈today〉で、青色の記号で示したのがその例である。ここでは分布範囲がより広い“個 ge”について解釈を述べる。まず共通の head(“日 ri”)を有した二音節語(“今日

jin ri”、“明日 ming ri”などが“強-弱”型アクセントを取るようになり、それとともに head の語義が弱化した。このように語が音声、意味の両面で弱化すると、他の語の牽引を受けやすくなるのは、言語を越えた普遍的現象である。北方方言の時間詞は、“這一個 zhe yi ge(>zhei ge)”(これ)、“那一個 na yi ge(>nei ge)”(あれ)のような代名詞の牽引を蒙るに至り、“今日個 jin ri ge”のような三音節語が形成された。これは一種の類推作用の産物であり、いわゆる“文法化”のメカニズムにも近いが、意味的関連のない特定の語群による牽引作用が想定されることから、“類推牽引”と呼ぶ。地図 8 で〈yesterday〉又は〈evening, night〉を表わす“夜里 yeli”の生成メカニズムもこれと同じで、“夜来 yelai”が代名詞“這里 zheli”、“那里 nali”の牽引を受けて“夜里 yeli”となった。これらの変化によって方言が得たものは、語形の安定化であった。

ところがその後、三音節常用語が“中-弱-強”型のストレスを取ったことに起因して、語は再び弱化の道を辿り始めた。“今日個 jin ri ge”などの第二音節が弱化の末に“兒化”して“今兒個 jinr ge”のような二音節語になり、さらに“強弱”型ストレスの適用によって“個 ge”まで弱化してしまったことである。今回の危機に際して救世主として登場したのは、head に“天 tian”を取る語群であった。“晴天 qin tian”、“陰天 yin tian”などの天候に関する語、また四季を表す“春天 chun tian”、“冬天 dong tian”等(尤も後者は牽引によって“春上”、“春里”などに变化した方言もあったが)。さらに“走了兩天”のような“天 tian”の量詞的用法によって、日にちを表す語形の“個 ge”から“天 tian”への類推が促進された(大河内 2001)。そして事の本質は、方言話者が“個 ge”のような無意味な成分に飽き足らなくなり、より表現力豊かな形式“天 tian”に取り替えたことである。“今天 jin tian”“明天 ming tian”等が勢力を広げたのは、標準語教育やマスメディアの力によらずとも、いわば必然であった。地図 9 に表現されたように、“個 ge”を含む語形はなお広い分布領域を有している。しかし〈today〉から遠い日(〈あさって〉、〈しあさって〉、〈おととい〉、〈さきおととい〉)では、“天 tian”の浸透が顕著であり、包囲網が狭まりつつある(岩田 2007b: 20-22)。

時間詞が類推牽引のような作用を蒙ったのは、各語が共通の head を取り、全体として paradigmatic な関係を形成するためである。このような体系に組み込まれない他の多くの語はこの種の変化とは無縁に見えるが、例えば、北方方言で“壁虎 bihu”(ヤモリ)、“蚰蜒 pifu”(アリ)、“蝙蝠 bianfu”(コウモリ)の語形がいわゆる“類音牽引”によって互いに接近したのは(岩田 1996: 238 -239)、音声、語義の両面で不安定となったこれらの語が、いわば寄り添いあって語形の上で体系化したその結果である。このような牽引現象を生む根本原因は、方言の話し手に常に言語記号の恣意性を低めようとする無意識の意識があることである。恣意性を低めるための簡便で最も頻度が高い手段として民間語源(folk-etymology)がある。

[同音衝突と同義衝突]

言語地図の解釈は、職人芸的な色彩が強く、百人いたなら百通りの解釈がありうるかのような印象がある。これは一つには、言語現象が人間をとりまく物質的、精神的諸現象と密接不可分であり、それら非言語的要素に関する知識と洞察が不可欠な人間科学の総合領域だからである。何通りもの解釈があり得ることは、そこに提示された言語の歴史が真実でないことを意味しない。むしろ非言語的要素を一切排除した所で成立する“祖語の再建”などは、それが如何に論理的な整合性を有する仮説であったとしても、真実への距離の近さという尺度で測れば、言語地理学の解釈には及ばないと信ずる。言語変化にはいくつものパラメーターがあり、それらが絡み合っている上に、人間の“気まぐれ”という厄介なパラメーターが加わる。故にそのアウトプットがメカニカルな“法則性”だけでは説明し尽くせないことは、もとより当然である。ファジーなものをそれと認めた上で、絡み合った糸をほぐす努力を重ねることにこそ人文科学の本領があろう。

一方、ヨーロッパ、日本、そして中国と、全く同質の言語変化が言語の違いを超えて観察されるからには、個々の方言地図の解釈にとどまらず、変化の成因、形態、そして結末(ジリエロンのいう“治療”)を一般化する努力も必要である。そのような努力の一つに馬瀬(1992)がある。本稿もそれに倣って初歩的な一般化を試みる。

まず変化を促す要因には内部的要因と外部的圧力がある(Dauzat1922)。上で挙げた音韻変化、牽引、民間語源は内部的要因である。外部的圧力は、主要には語の伝播によってもたらされる。最近は“言語接触”という言葉が好んで用いられているが、これはそもそも言語地理学の自明の前提である。漢語方言は“方言接触の坩堝”と呼んで過言ではない。

内部的要因と外部的圧力が引き起こす様々な変化の形態を次の二つにまとめる。

(1) 同音衝突：一つのカタチをめぐる二つのイミの争い。

(2) 同義衝突：一つのイミをめぐる二つのカタチの争い。

以下、P、Q はカタチ、x、y はイミを表す(馬瀬 1992 に倣う)。→は圧力のかかる方向を示す。

(1) 同音衝突

内的要因によって生起することが多い。P(x) と P(y)が同音衝突の危機にあったとしよう。下記はそのありうる結末。

(A) 一方の勝利と他方の敗北(逃走): $P(x) \rightarrow P(y) > Q(y)$

(B) 双方の妥協: $P1(x) / P2(y)$

(C) 地理的な相補分布の形成: $\boxed{P(x) | P(y)}$

カタチ P をイミ x とイミ y が争う同音衝突の結末の一つは、勝者が P の位置を占め、敗者がカタチを Q に変えることである。例えば、音韻変化の結果、不幸にして [pi^{陰平}] なるカタチを有するに至った〈筆〉は、名うてのタブー語と争う羽目となり、当然のごとく敗北した結果、山東西部ではカタチを [pei^{陰平}] に変えた(Li1994)。タブー語の生命力は強靱である。これに対して、互いの生命力が拮抗する場合は、x,y の双方がカタチを変えることがある。例えば、中国西南地方の〈ハエ〉(fly)は、類音牽引によって〈カ〉(mosquito)と同じ語幹“蚊 wen”を取るに至ったが、前者を“夜蚊子 yewenzi”、“長脚蚊 changjiaowen”、後者を“飯蚊子 fanwenzi”のように、いずれも修飾成分を付加して区別する方言がある(岩田 2000:31)。

同音衝突は地理的な相補分布の形成によって回避されることがある(馬瀬 1992, Iwata2006)。現象的には地図 8 の青と黒の四角記号がそれにあたる。

長江流域から淮河にかけての地域では“夜来 yelai”、“夜里 yeli”が〈evening, night〉を指すが、北方では〈yesterday〉を指すことが多い。但しこれは同時に同義衝突の例とも見なしうる(下記参照)。

村上(2007)は、言語外的要因によって起こり得る同音衝突の例を報告している。中国北部(黄河以北)では、かつて〈ダイズ〉“大豆 da dou”と〈アズキ〉“小豆 xiao dou”が仲良くペアをなしていた。ところがある時、シルクロード経由で西北地方に〈ソラマメ〉が伝来して、この仲睦まじき関係が崩れた。〈ソラマメ〉はその大きな図体に任せて“大豆”の座を奪い、〈アズキ〉“小豆”の亭主に納まったのである。追い出された〈ダイズ〉は、色彩成分を前置する“黄豆 huang dou”、“白豆 bai dou”、“黒豆 hei dou”などにカタチを変えた。

(2) 同義衝突

外的要因によって生起することが多い。P(x)が分布していた所へ Q(x)が伝播したとしよう。下記はそのありうる結末。

(A) 一方の勝利と他方の消滅: $Q(x) \rightarrow P(x) \rightarrow \text{消滅}$ 又は
 $P(x) \rightarrow Q(x) \rightarrow \text{消滅}$

(B) 意味又は用法の分担: $P(x_1)/Q(x_2)$

(C) 混交形の誕生: $\{(P+Q) \div 2\}(x)$

(A)は一方が勝利するケースである。(B)、(C)は新旧両語形の力が拮抗して妥協を図るケース。

(B)を音韻論に喩えれば、PとQはx1、x2という環境の違いによって姿を変える条件変異(conditional variant)である(Iwata2000:192)。地図1で、〈父〉を表す“爺 ye”が長江流域に到達した時、そこには土着語形“爹 die”があった。この二語形の争いは、“爹 die”を呼びかけ語(vocative)に、“爺 ye”を言及語(designative)に、という用法の分担によって決着した。このような現象は決して特殊なものではない。いわゆる“文白異読”の本質は、漢字の発音が二つないしそれ以上あるということではなく、語 P(x)があった所へ、外部から語 Q(x)が伝播した結果、 $P(x_1)/Q(x_2)$ という意味又は用法の分担が図られたことである。特に“同義衝突”なる概念を立てる一つの理由は、中国方言学の特殊事情を重視するためである。なお(B)は、PとQが意味や用法を全く変えることな

く、音韻論の自由変異(*free variant*)のように無条件で併用される場合もありうる。

(C)は新生事物の命名に際して生み出される *word blending*(例:[ゴリラ+クジラ]÷2=“ゴジラ”)と現象的には同じだが、方言学でいう混交形とは P と Q の地理的な接触によるものを指す。地図 9 において“今兒天 *jinr tian*”、“今個天 *jin ge tian*”は、それぞれ“今天 *jinr*”、“今個 *jin ge*”が分布していた所へ新語形“今天 *jin tian*”が伝播、接触して生まれたものであろう。混交形の例は中国語方言に非常に多い(岩田 2007a)。激しい方言間接触があったことを物語る。

“指示対象の転移”(semantic shift)は事実上、同義衝突と同音衝突の双方が起きていることになる。図式化すれば次のようになる。

$$Q(x) \rightarrow P(x) \rightarrow P(y)$$

ここで、 $Q(x) \rightarrow P(x)$ は同義衝突であり、 $P(x) \rightarrow P(y)$ は同音衝突である。上掲地図 8 について言えば、青色の四角記号は、“夜来 *yelai*”又は“夜里 *yeli*”の指示対象が〈*evening, night*〉から〈*yesterday*〉にシフトした地点である。これらの地点では、〈*evening, night*〉の方が“黑夜 *heiye*”、“後晌 *houshang*”など別の語形に置き換えられた。

$$\text{黑夜}(\text{evening}) \rightarrow \text{夜来}(\text{evening}) \rightarrow \text{夜来}(\text{yesterday})$$

しかし音韻変化における *chain shift*(連鎖変化)と同じことで、実際には衝突は避けられている。このことの地理的な反映が相補分布の形成である。

なお、地図 8 ではカットされてしまったが、北方でも北京から東北にかけての地域には〈*night*〉を表す“夜里 *ye li*”がかなり分布している。これは北方固有のものではなく、おそらく明代初期における南京から北京への遷都に伴って、江淮地方の語形が移植されたものである。同様な例として〈*evening*〉を表す“晚上 *wanshang*”、〈*morning*〉を表す“早上 *zaoshang*”などがある。移植されたのは語形だけにとどまらない。これまで〈*evening, night*〉と総称してきた概念を〈*evening*〉と〈*night*〉に区分する時間の捉え方も含まれたであろう。このような例は、本稿第一部で紹介した『漢語方言地図集』に多数見出せるものと期待している。語の北から

南への伝播という 2000 年のスパンで見た時の大きな潮流に対するいわば逆流が過去 500-600 年間で生じたことになる。

[文献]

- Chinese Academy of Social Sciences and Australian Academy of Humanities. 1987. *Language Atlas of China*. (中国語言地図集). Longman(朗文), Hong Kong.
- Dauzat, Albert. 1922. *La géographie linguistique*. Librairie Ernest Flammarion, Paris. [松原・横山 1958 『フランス言語地理学』, 東京, 大學書林].
- Gilliéron, Jules and Mario Roques. 1912. *Etudes du Géographie Linguistique d'après l'Atlas Linguistique de la France*. Paris, Librairie Honoré Champion. [大川・グロータース・佐々木. 1991-1997「ALF による言語地理学的研究」, 日本方言研究会予稿集 52-57 号, 61-64 号].
- Hayashi, Tomo (林智). 2005. “Introduction to the PHD System”. Progressive Report, Vol.1, Grant-in-Aid for Scientific Research (B), 2004-2006, Director: Ray Iwata, Linguistic geography of Chinese Dialects by Use of a Newly Developed Computer System “PHD”, 8-24.
- Iwata, Ray (岩田礼). 1995. “Linguistic Geography of Chinese Dialects - Project on Han Dialects (PHD)-” *Cahiers de Linguistique Asie Orientale*, Vol.24-2, EHESS-CRLAO, Paris, 195-227.
- Iwata, Ray. 2000. “The Jianghuai Area as a Core of Linguistic Innovation and Diffusion: A Case of the Kinship Term "ye 爺"” *In Memory of Professor Li Fang-Kuei: Essays of Linguistic Change and the Chinese Dialects*, University of Washington /Academia Sinica, 179-196.
- Iwata, Ray. 2005. “Linguistic Geography of Chinese Dialects by Use of a Newly Developed Computer System “PHD” - History, aim and some

controversial issues –”, Progressive Report, Vol.1, Grant-in-Aid for Scientific Research (B) , 2004-2006, .

Iwata, Ray. 2006. “Homonymic and Synonymic Collisions in the Northeastern Jiangsu Dialect - On the formation of geographically complementary distributions –” *Linguistic Studies in Chinese and its Neighboring Languages: Festschrift in Honor of Professor Pang-hsin Ting on His Seventieth Birthday*, 1035-1058.

Li, Rong (李荣). 1994. A Tabu Word in Chinese. *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*, 421-427.

Norman, Jerry.1988. *Chinese*. Cambridge University Press.

Zavjalova, O. and E. Astrakhan.1998. *The Linguistic Geography of China*. Progressive Report, Vol.1, Grant-in-Aid for Scientific Research (A), 1997-1999, Director: Mitsuaki Endo, Linguistic Geography & Cultural-Natural Geography in China.

秋谷裕幸 2003. 『吳語處衢方言(西北片)古音構擬』, 好文出版.

曹志耘 2008. 「《漢語方言地圖集》簡介」, 岩田礼編 2008, 5-14.

趙元任 1928. 『現代吳語的研究』, 清華学校研究院叢書第四種.

趙元任、丁声樹、楊時逢、吳宗濟、董同龢 1948. 『湖北方言調查報告』, 中央研究院歷史語言研究所.

Grootaers, Willem (グロータース). 1994. 『中国の方言地理学のために』, 好文出版 (岩田礼・橋爪正子共訳).

Grootaers, Willem (賀登崧). 2003. 『漢語方言地理学』, 上海教育出版社 (石汝傑・岩田礼共訳).

河北省昌黎県志編纂委員会・中国社会科学院語言研究所合編 1960. 『昌黎方言志』, 科学出版社.

岩田礼 1988. 「江蘇・安徽両省における親族称谓形式の地理的分布と古称谓体系の再構」, 『漢語史の諸問題』(京都大学人文科学研究所共同研究報告), 207-272.

- 岩田礼 1992. 「漢語諸方言の言語地理学的研究－PHD(Project on Han Dialects)の概要と結果」, 『日本方言研究会第 55 回研究発表会予稿集』, 27-36.
- 岩田礼 1995a. 「漢語方言史の不連続性－中国語言語地理学序説」, 『人文論集』45-2, 静岡大学人文学部, 43-77.
- 岩田礼 1995b. 「漢語方言“祖父”“外祖父”称谓的地理分布－方言地理学在歴史語言学研究上的作用」, 『中国語文』1995 年第 3 期, 203-210.
- 岩田礼 1996. 「読《山東方言志》六種」, 『中国語文』1996 年第 3 期, 236-240.
- 岩田礼 2000. 「現代漢語方言の地理的分布とその通時的形成」, 『中国における言語地理と人文・自然地理(7):言語類型地理論シンポジウム論文集』(科研費研究成果報告書、研究代表者:遠藤光暁), 5-49.
- 岩田礼 2002. 「世界の方言地理学:中国」, 馬瀬良雄監修・佐藤亮一他編『方言地理学の課題』, 明治書院, 117-126.
- 岩田礼 2007a. 「方言接触及混淆形式的產生－論漢語方言“膝蓋”一詞的歴史演變」 *Bulletin of Chinese Linguistics*, 1.2, 182-212.
- 岩田礼 2007b. 「漢語方言〈明天〉、〈昨天〉等時間詞的語言地理学研究」, 『中国語学』254, 1-28.
- 岩田礼、太田斎共編 2007. 『方言地図及其解釈(中文版)』, 平成 16-18 年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書“中国語方言の言語地理学的研究－新システムによる『漢語方言地図集』の作成” 第 3 分冊.
- 岩田礼編 2008. 『国際シンポジウム:日中両国の方言の過去、現在、未来』, 金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第 2 集, 金沢大学文学部. (執筆者:曹志耘、大西拓一郎等 5 名)
- 李栄 1985. 「漢語方言分区的幾個問題」, 『方言』1985 年第 2 期, 81-88.
- 馬瀬良雄 1992. 『言語地理学研究』, 東京, 櫻楓社.
- 大河内康憲 2001. 「「日」と「天」と「号」」, 『現代中国語研究』第 3 期, 1-9.
- 柴田武 1969. 『言語地理学の方法』, 東京, 筑摩書房.

- 村上之伸 2007. 「“大豆”和“小豆”」 岩田礼、太田齋共編 2007, 95-103.
史皓元(Simmons, Richard)、石汝傑、顧黔. 2006. 『江淮官話与吳語边界的方言地理学研究』(Chinese Dialect Geography: Distinguishing Mandarin and Wu in Their Boundary Region), 上海教育出版社.
項夢冰、曹暉 2005. 『漢語方言地理学—入門与实践』, 中国文史出版社.

Summary

**Chinese Geolinguistics:
History, Current Trends, and Theoretical Issues ***

IWATA, Ray

Key Words: Geolinguistics (linguistic geography), Willem Grootaers, Bernhard Karlgren, *Language Atlas of China (LAC)*, Project on Han Dialects (PHD), Huaihe line, Changjiang line, analogical attraction, homonymic and synonymic collision

Part 1 History and Current Trends

Both the idea and the methodology of linguistic geography were introduced into China as early as the 1940s, when Father Willem Grootaers started his work in north Shanxi as a Catholic missionary. Unfortunately, however, his ambitious project, which intended to carry out surveys throughout China, was not realized as he left China in 1948. Since then, linguistic geography ceased to exist in China, meanwhile the mainstream study came to be directed toward two purposes: one is to reconstruct the ancient phonology, and the other is to classify the dialects and demarcate the areas.

* Revised version of the paper presented at the 14th NIJL International Symposium “Geolinguistics around the World”, August 22-33, 2007, Nadao Hall, Tokyo.

Succeeding the comparative tradition established by Bernhard Karlgren (*Dictionnaire dialectal* in the book *Etudes sur la Phonologie Chinoise*, 1915-1926), young leaders at the Institute of History and Philology in Academia Sinica, Yuen-ren Chao et al, started their surveys in central China from the late 1920s. These surveys concentrated on recording the Chinese character readings according to the phonological framework provided by the rhyming dictionary *Qieyun* compiled in 601 A.D. Through surveys of this sort, the sound correspondences among the modern dialects were given in a convenient fashion, and this facilitated the researchers to find the criteria for dividing the dialects.

After 1949, under the PRC regime, although the task imposed on Chinese dialectology was to propagate a standard language, Putonghua (PTH), scientific and descriptive spirits survived for ten odd years, as demonstrated by the model case survey carried out by the Academy of Social Sciences in the Changli County, Hebei Province. Descriptive studies were revived after a long hiatus in 1979, and it was revealed shortly thereafter that the target of the scholars in the Academy was once again to classify and demarcate the dialects. Thus the atlas *Language Atlas of China* (LAC) was published in 1987, comprising 18 maps of the Han dialects and 17 maps of the minority languages. Preceding this event, in 1983, Russian linguist O. Zavyalova, independent of the studies in China, reported on her discovery of the long isoglosses, which divide the whole Guanhua area into northern and southern sections.

Unlike in former days, recent trends in Chinese dialectology are widely diversified. While the mainstream seems still to emphasize classification and demarcation, new methodological and theoretical trends such as “lexical diffusion” and “comparative dialectal grammar” have also been formed. The revival of linguistic geography appeared in Japan, as our research project, PHD (Project on Han Dialects), launched in 1989, and our Japanese translation of Grootaers’s works appeared in 1994. The latter was retranslated into Chinese by R-J. Shi and was published in China in 2003.

Two important publications appeared during the past two years: one is *Chinese Dialect Geography: Primer and Practices* by M-B. Xiang and H. Cao, and another is *Chinese Dialect Geography: Distinguishing Mandarin and Wu in Their Boundary Region* by R. Simmons, R-J. Shi and G. Qian. Both studies are based on detailed surveys, but discussions are centered on the issues of isogloss and dialect boundary.

The most noteworthy event currently progressing is the project directed by Z-Y. Cao, Beijing Language & Culture University. The purpose of this project is, unlike LAC, to compile the dialect atlas comprising hundreds of maps which are drawn item by item for lexical, phonetic and syntactic features. Cao and his colleagues carried out the survey of 930 dialects, mostly those spoken in the villages but not in the cities. At the moment of this writing, they have already completed the cartographic process, and *Linguistic Atlas of Chinese Dialects* (5 volumes) will come out soon.

Part 2 Theoretical issues: Interpretation of linguistic map

In this section, I will demonstrate some fruits cropped in our research project, PHD (Project on Han Dialects), while presenting some maps on lexical items.

1) An overview of the dialect distribution

It has been known that Chinese dialects evince a north and south opposition, with the southwest area undergoing a considerable degree of northern influence. There are two main dialect boundaries which run along the two rivers: a longer one, hence historically more significant one, is referred to as *the Huaihe line*, and a shorter one is referred to as *the Changjiang line*. This situation has been formed by a long-term northernized process of the central and southern areas.

Our maps indicate that the dialectal influence of the present Capital, Beijing, was limited, and that the city Nanjing as well as its neighboring area (Jianghuai) functioned as a core area (Kernlandschaft) within the central and southern areas. The role of the River Changjiang is of importance with respect to the transmission of the linguistic features from this core area.

2) Reconstructing the history of words

Being blessed with the richest of written texts, historical linguistics in this country has depended too much on philological evidence, while the purely dialectal approach unbiased by these texts has not been even in the scope of linguists until recently. Etymological studies so far have been centered on finding a one to one correspondence between the form recorded in the written text and that found in the dialect. It is my belief that linguistic geography can contribute greatly in this respect. Some instances are demonstrated.

3) Words in collision

Recent developments in our research have led us to find phenomena that were clearly recognized by the founders of linguistic geography, J. Gilliéron et al., but have been hardly noticed by the researchers in the Chinese field even now.

Phonetic and semantic contents of words may be damaged due to internal and external factors, and at this moment the dialect usually provides them with any linguistic remedy for recuperation. This process, which J. Gilliéron called “verbal pathology and therapeutics”, is illustrated for Chinese time words. Curiously, in many northern Chinese dialects, the word forms for “today”, “tomorrow” etc. take such suffixes as possessed by pronouns. The cause for the change was a decline in phonetic and semantic contents of the head (e.g., “ri 日”), and eventually these time words became to be attracted by some particular pronouns, e.g., “這個 zhege”(this) and “那個 nage”(that), and have changed to such forms as “今日個 jinri ge”.

A word may come into collision with another due to internal and external factors. Sound change, attraction by the other forms, and folk-etymology are common factors that could internally affect the phonetic and semantic contents

of words. The external factor mainly refers to the transmission of words from one locality to another, and this eventually will cause so called “dialect contact”. Indeed Chinese dialects are a crucible of “dialect contact”.

It is proposed that the word collision is of two types: homonymic collision and synonymic collision. The former is defined as the conflict between different designations for a single form. It is mostly triggered by internal factors, and some sorts of remedies are usually adopted for rescuing the defeated words. Some instances are illustrated.

Synonymic collision is defined as the conflict between different forms for single referent. It is mostly triggered by external factors. Suppose that one form “P” existing in an area encountered another form “Q” which transmitted from the adjacent area, and the two forms came to compete with each other for getting a single referent (semantic category) “x”. There could be at least three outcomes in this type of collision.

- (A) Victory of the recent form “Q” over the original form “P” (or vice versa)
- (B) Dividing the semantic field between “P” and “Q” without changing referent: P(x1)/Q(x2)
- (C) Forming a blend form for “x”: $\{(P+Q)\div 2\}(x)$

Finally, the mechanism of “semantic shift” is discussed with reference to the two types of collision mentioned above. This can be compared to the “chain shift” in historical phonology, and can be formalized as follows: $Q(x)\rightarrow P(x)\rightarrow P(y)$, where the form “P” shifts from “x” to its neighboring semantic range “y”, while the range “x” being filled in with the recent form “Q”. On dialect maps, this situation usually manifests itself in a complementary distribution of the form “P”.